

古高取を伝える会会報

直方の高取焼



古高取

目次	
古高取の魅力伝える	2
平成二十四年度 定期総会	2
古高取の広場	3
活動の記録	5
なんでも掲示板	5

「よかった」

欧米に仏教を広めた学僧鈴木大拙は、キリスト教は「父」の宗教であり、仏教は「母」の宗教であるという。

キリスト教では「罪」といい、罪を罰する、罪を償うという言葉があるが、仏教ではその概念がなく、仏の「慈悲」の心で許されてしまう。そこに、キリスト教の厳しさ、仏教の優しさが表れている。

そして親鸞聖人は言う「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と。

ここにおいて「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」と阿弥陀さまの大慈悲のたのもしさを思い知らされる。

よかった。

鷹取 宗恵

古高取の魅力を伝える

陶芸の魅力

細田 延俊

器には空(間)がある。

手は粘土をのぼし、器形を作っているが、その実空を作っていて、その空が器という形を造形している。それは他の芸術、工芸にない陶芸独特の技法であり、エートスでもあるように思う。

食物や酒、花を容れる空(間)は器のもつ宿命だが、その宿命を逆手に取った時、不思議なことに器は何も容れない、ただ空を容れることよって自足する陶芸術というものを見出したのだ。用を拒むわけではないが、すでに空に満たされたもの。器は用を超えたものになったのだ。

器は元々やまと言葉では「空わ(輪、端)」であり、「虚わ」ではなかったか？更に言えば、「うつ」という言葉には他に「映」「写」「遷」「移」「鬱」「洞」「棄」等があり、それらはすべて現世を超えた何かを指し示しているように思われる。虚が実を作る。それは老子の世界



だが、轆轤を挽いているとそのことが如実に感じられる。優れた器形とは虚と実、さらに重力との拮抗の中にあるのだ。

もし壺に空洞がなく、たんなる粘土の塊だったらと思うと、たまたまなく鬱陶しくなる。壺には壺の形をした空洞がどうしても必要であり、それが私たちの内なる空にこだまし、本性をぼんやりと浮き上がらせてくれるのではないか。

私たちがまた空なる皮袋であり、そこにしか深い安息はないのだと。

平成二十四年度 定期総会

△平成二十五年五月二十日(日)▽
場所・直方市中央公民館三階
第三学習室

第三学習室

平成二十四年度の定期総会は、出席者が十九名、委任が二十八名でした。「開会のことば」に始まり、活動経過報告、決算報告、活動計画、予算(案)について滞りなく承認いただきました。役員の変更は無く、更に古高取の魅力を伝えるべく努力したいと思います。また、引き続き開催された記念講演は三十三名の出席者がありました。



渡久兵衛氏をお迎えして

副島 邦弘

平成二十五年定期総会の基調講演は、豊前国焼上野の渡窯の窯元の渡久兵衛氏をお迎えして開催した。

氏は、上野皿山の入口に位置する上野焼の窯元、上野三家の十時・吉田(十時の分家)・渡の一つで、代々継承され、明治の中期には廃窯となりその後復興され、最後に渡窯が再興されたのが五十年前、昭和三十九年であった。

豊前国焼上野焼の端緒について若干説明を加えると、文禄・慶長



の役後、李朝陶工尊階は、慶尚南道泗川より、毛利耆岐守勝信に従い肥前唐津にきたが、慶長七年（二六〇二）茶人大名細川忠興（三斎）が、豊前小倉藩主となり、尊階を棟領に招き藩窯として、上野村釜ノ口に開窯し「三斎好み」の格調高い茶陶器を作陶していた。

寛永九年（一六三二）肥後熊本藩主加藤家が改易をうけて、細川家が転封で熊本城主となり、これによって上野焼の尊階（倭名上野喜蔵高国）は、長男忠兵衛・次男藤四郎とともに八代郡高田郷に移り窯を開いた。三男孫左衛門は母と共に残って次の藩主小笠原家に仕えた。十時孫左衛門は晩年に十時甫快とも称していた。十時家・渡



家は代々世襲し明治に至っている。豊前国焼上野は、この皿山の地で一子相伝で維持された。

講演は、渡窯再興の苦労話を中心に、笑いを入れながら八十三歳の講話で、その主題は氏の自分史であった。

昭和四年旧赤池村上野皿山で生まれ、昭和三九年（一九六四）に渡窯を復興し十一代を継承しました。この時一番喜んでくれた父親が一月末に死去し、初窯出しを見せることが出来なかったのが残念でした。三十四才で、ずぶの素人で本格的な陶芸修業をしていなかったで、職人さんを三川内（佐賀）から入れました。三川内は平戸藩の藩窯で磁器物を中心に焼いていたので、職人さんは陶器であったので苦労したと思われます。一応初窯は成功し、これと並行して茶碗造りの修業にも努力しました。職人さんを選ぶのと、窯元の仕事とそして経営一体化で、金の苦勞がありました。窯も重油ガマを入れるため、家屋を抵当にして銀行から資金を得ました。萩焼の作家であった坂田春泥・泥華氏に師事し、昭和四十五年から五年間、三カ月ごとに茶碗を持って萩の現地

にいつて教えを乞いました。上達し、ロクロまわしの技術等を自分の物にし、昭和五十二年に日本工芸会会員に推されました。これによって皿山の地で渡窯を構えることができ、息子仁が成長し十二代を継承してくれました。

渡窯の復興から現在に至る流れを語ってくれた。最後に物づくりは、体調を整え、心と技の一体化であると結ばれた。

古高取の広場

焼物教室を体験して

九州女子大学附属鞍手幼稚園
園長 平地 佐代子

縁あって、九州女子大学附属鞍手幼稚園の園長に就任したのが、今年一月。四月からどんな保育活動をしていこうかと思っていた時、ふと思いついたのが、姪の小学校での焼物教室でした。以前お茶の先生についてお稽古をしていたこともあり、直方市にこんな素晴らしい焼物があることを知っても



らうためにも、是非、鞍手幼稚園で焼物教室を実施したいという思いから、「古高取を伝える会」事務局に連絡を取らせて頂きました。

六月一日の「ファミリー参観」で、保護者の方と一緒に粘土でお茶碗の形にしました。最初は、「園児たちはちゃんとうまくできるかしら」と心配しましたが、そんな心配は全く要りませんでした。

形を作った後は、粘土ペラを使ってハートマークを描いたり、いろんな模様を描いたり、園児たちの創作力には大人は及びません。

今は、教室に置いている『古高取・古唐津展』のパフレットを

眺めては、「お茶碗、どんな色に出来るのかなあ」と、みんなとつても楽しみにしている様子。園児でも良いものはちゃんとわかっているものですね。二月の作品展では、マイお茶碗を展示します。それから、「お茶会もこのお茶碗でしたいなあ」と私の思いは膨らみます。この良い機会を与えて下さいました「古高取を伝える会」の皆様にご心より感謝申し上げます。有難うございました。このご縁を今後も繋げていきたいものです。

古高取考察

小山 亘

高取家の『東山高取焼仕法記』安永八年（一七七九）に「小堀遠江守殿茶湯為宗匠之時、忠之公より右八藏新九郎兩人ヲ伏見へ遣わさる。即ち正一公（小堀遠州）へ謁し奉り、お好みヲ受け製作す。」という文書が残されている。これに李朝陶工の八藏と新九郎親子が二代藩主黒田忠之公に命じられて京都伏見に上り、小堀遠州に茶の湯を習った後「遠州好み」の茶器を焼造したと伝える。

しかし遠州は、頂を極めた茶匠であったが職人ではなく、遠州が茶器を焼造した話は聞いたことがなく文献も見当たらない。

そこで茶器の焼造は、遠州と入魂（じっこん）の熟練工から学んだ飯説を立ててきた。何故なら奥義秘伝や一子相伝は、師匠となる頭主から子孫や弟子達が歳月を経て教養や礼儀まで習得するもので、そうした環境下でなければ技術は身につかないし、本格的で品格の高い茶器ほど道を極めた師匠に付いてさらに精進しなくてはならないものではない。この話は今は亡き昭和の名工備前焼二代目 藤原

樂山・萩焼十代目 三輪休雪（休和）氏を始め、十二代目 高取八山氏や名だたる古窯の茶器職人の先達から直接採話したものである。

八藏親子に限らず誰でも茶の湯を習い、茶室の空間や茶器の姿形・大きさ・見所を習得し教養と礼儀を磨いてもなかなか思い通りの本格的な茶器の製作は出来ないし、それほど茶器焼造は奥が深い世界で「死ぬまで学習」とも言われ、萩焼の三輪休和氏は「普通の職人ならば二十年もやれば誰でも達者にはなれる。しかし、それからがむずかしい。名工とか達人とか言われる境地まで行くには技術以外に自分自身の心境を高めるほかない。」と講談社『日本のやきもの現代の巨匠9』に記され、直接伺ってもいる。そしてさらに、注目したのが茶入職人として知られる別所吉兵衛が遺した『別所吉兵衛一子相伝書』の中の「一、我十八歳より今日に至る迄細工を習い焼くといえども生得拙き故出来ず然れとも近年、遠州公の御目がねに預かり古瀬戸を模すといえども中中似るべき物にてもなし。」の箇所。ここに長年茶器の製作をしてきたが「遠州好み」の茶器製作は、中々難しいものであると言っている。歴代の茶頭となった「利休・



小堀遠州



MOA美術館 所蔵

織部・遠州」が好むものを焼き、奥義秘伝書を記すことが出来た立場にあり「京三条せとものや町」に店を構えていた「瀬戸の頭主」瀬戸陶工の頭領、別所吉兵衛が記した伝書が物語っている。

『別所吉兵衛の一子相伝書』文禄四年（一五九五）奥書に釉薬の奥義秘伝が記され、伝書の前半は先祖と言える瀬戸陶法の始祖（茶入作りの元祖）四郎左衛門から三代目の春慶までの伝記となっていて、春慶が案出した春慶薬は代表的な釉薬と記されている。

この門外不出の奥義秘伝や一子相伝書は当然、子孫や弟子にしか伝承されないものだが高取清右衛門常方が記した『高取家文書』

（高取宗家の一子相伝書）文政三年（一八二〇）に八歳の時代に何と二十色もの釉薬色が記され、その中に「春慶薬」が明記されていたのである。

これまでに目を通してきた史実・伝承・文献、そして発掘資料を並列すると吉兵衛は、内ヶ磯窯の開窯時から「織部好み」の痕跡を数多く遺している。

吉兵衛が従弟の茂右衛門を高取（内ヶ磯窯）に焼き下らせた話を伝書に記していたことは既に述べたが、二代藩主の黒田忠之までもが「高取」と呼んでいた内ヶ磯の発掘が（古高取通信十一号参照）このことを雄弁に物語っている。こうした時系列の思考も古高取研究解明では避けて通ることの出来ない視点である。

活動の記録

●古高取ミニバーチャル博物館

〈平成二十五年一月〜三月〉

古高取の魅力を伝える方法の一つでもある「バーチャル博物館」。二十四年度は、映像を使った簡

単なものを制作しました。詳しくは、ホームページをご覧ください。

●子供焼物教室

〈平成二十五年五月〜十一月〉
場所：直方市内の小学校

今年度の六年生を対象にした焼物教室が始まっています。今年度で、六年目の活動となり、市内十一校で四九三名の生徒さん達が体験します。

体育館・工作室、ムンムンする暑い中、スタッフの皆様の協力に感謝申し上げます。



四月に例年通り市役所において担当の先生方への説明会を行いました。

年毎に学校側の取り組み方にも変化が見られ「継続は力なり」と感じます。

今後の事についても具体的にこちらの状況（特別会計）のこともお話しすることが出来ました。いい方向に行けばいいと思います。

一学期に八校、二学期に三校、うち六校が土曜日（授業参観）で保護者の方がおられると緊張しますが、「古高取を伝える会」の設立目標の一つ「次世代につながる活動」を一人でも多くの方に知ってもらえるいい機会ととらえています。

【嬉しいお知らせ】

六月一日に鞍手幼稚園（年長組）四十六名と保護者の方との陶芸教室を実施することが出来ました。

園長先生が新入小学校の保護者として経験されたことがきっかけになりました。

私たちの心配はよそに、とてもいい作品が出来ていました。作品の完成を子供達は楽しみに待っていると思います。

末松 登志子

なんでも掲示板

●マイ茶碗でお茶会体験

〈平成二十五年一月〜三月〉



今年の一月〜三月にかけて、市内の小学校でマイ茶碗を使ったお茶会が催されました。

お茶会で子供達が緊張した表情でお行儀よく赤い毛氈の上に正座しお抹茶をいただく姿に思わず胸が熱くなります。

焼物教室で作ったマイ茶碗を誇らしげに手にし、お茶の作法を学ぶ子供達は実に嬉しそうにみえます。

昨年度は市内十一校の六年生が焼物教室からお茶会まで体験しました。このことは、我が部会が目指してきたことで、とても嬉しく思っていますし、この先ずっと各学校が六年生の伝統行事として継続して行ければと願っています。

永富 セツ子

● 第四十六回 高取焼陶器まつり

平成二十五年四月二十六日(金)

二十九日(祝) 〳

場所：直方市畑・永満寺地区

直方の地元窯元や畑公民館等で、陶器販売はもちろん、地元の農産物や特産物等の販売も行われました。毎年、春と秋に開催されています。



● 金剛山もとどり協議会だより
平成二十五年五月二十四日(金) 〳
場所：もとどりハウス

五月二十四日、総会を終えました。今年もまた綺麗なあじさいが咲き、六月二十六日には「あじさい祭り」が行われ大勢の人の参加で賑わいます。

末松 登志子

秋には収穫祭と今年も直鞍(ちよつくら)ふれ旅に参加致します。



里山を満喫です。写真は昨年のもので

● 「演劇公演」
越後雪解け
親鸞の流罪

六月十八日(火)、円徳寺で第一回の公演をしました。

末法五濁の今を生きる視点をさぐりながらこの劇に取り組んでいます。

これから一年間各地の寺を回る予定です、機会があれば是非ご観劇下さい。

隅田(会長) 演出で、鷹取(副会長)も出演します。

次回は七月十三日(土)、光福寺です。



越後雪解け

親鸞の流罪

作・平岡春治

善人なおもて往生を
いわんや悪人をや

〈掲載内容募集〉

「古高取」の魅力を発信するためのイベント情報など募集しています。掲載可能な情報等がございましたら、事務局までご連絡ください。

〈編集後記〉

毎日、蒸し暑さと闘っています。この季節は湿気が多いからか？パソコンなどが壊れやすいようです。私のパソコンも先日壊れてしまい大変でした。

しかし、最近ではコンピュータが至るところで使用されているので、こう言った故障が大問題になる可能性は誰にでもあるのです。ああ怖い。

今年度は、より会員の意見を反映した内容にしたいと思っておりますので、ご要望などがありましたら遠慮なく言ってください。

「古高取通信」会報・NO14

〈発行〉

古高取を伝える会

〈発行日〉

平成二十五年六月三十日

〈現在の会員数〉

正会員 七十名(七十日)
賛助会員 二十名(二十日)
団体 三団体(三〇日)

〈マイ茶碗の数〉

4298個

〈事務局〉

〒八二二一〇〇二二六
福岡県直方市津田町七十四
TEL 〇九四九(三三)二二二一